

大宝二年戸籍と和銅元年戸籍

——虎尾氏「和銅元年の造籍」を讀みて——

高橋

歩

I

本誌創刊号に掲載された虎尾俊哉氏の「和銅元年の造籍」なる論文は、氏が史学雑誌に發表済の「淨御原令の班田法と大宝二年戸籍」(同誌六三の一〇)中で大宝二年戸籍に關して提起された新説——つまり、一般に大宝令の施行によつて造籍されたと考えられてゐる大宝二年戸籍は淨御原令による定期の造籍と解すべきである、というの強化を目的としたものである。

ところで、大宝二年の戸籍とは、現在する美濃國戸籍と筑前・豊前兩國戸籍との間に著しく記載様式の異なつた處をもつことで有名である。そこで、一方は淨御原令の他方は大宝令の規定によつて造られたものであらう、とかまた記載されてゐる種々の事

柄から同一令によつたものであらう。等といわれてきてゐる。これらに關しては、私も諸説の紹介がたがた驥尾に付して一説を提示したこと(大宝二年の造籍「日本史一〇二号」)があるので、以下詳細をくりかえさないが、その後について、例えば時野谷滋氏口本誌第二号の「義倉帳と其等戸」という論文で虎尾氏の新説を批判されつゝ、美濃國戸籍は大宝令によるものでないかと述べておられる。またこれと反対の意見として田中卓氏口同國戸籍の差未到に記載されてゐる國郡司の署名個所を検討し、その結果美濃國戸籍は淨御原令説に一致証を加え得た(「美濃國大宝戸籍に見える國司四等官制について」続紀研究三の一〇)とされておられる如くに、見解が統一されるどころか、研究の深化が見解をますます

す対立に迫りやるのみである。

このような混乱状態に対して虎尾氏が本誌に発表された論文は、従来と視角を異にした方法に立つて、ただけに高い評価を与えられるべきであらう。しかし、氏のこの論文は、大宝二年戸籍は全て淨御宗令によつたものであるという前提に立つて考察されたものであるから、この前提が一たび崩れるならば、この論文の意義も半減するはずである。だが、この論文はこれ自体に於いても十分検討されるべき内容をもつてゐるから、こゝでは氏が考えられたことが果して容認できるか否かを論じてみる。もとより菲士の身、或いは虎尾氏の真意を理解するに万全でないところもあらうかとおそれるが、承められようまいに燈師の斧を振うことにしたい。

Ⅱ

「和銅元年の造籍」(以下で論文といつた場合はこれを示す)の趣旨は、大宝二年戸籍が淨御宗令によるものであれば、和銅元年の造籍は大宝令施行後最初の造籍ということになり、このことは和銅元年の戸籍こそ大宝令の規定によつて造られた最初のも

のであるということの意味する、というのである。そして、この前提が史料的に実証できるか否かを論じて自ら立てた前提を認めてゐるのである。

右の前提が基本的に成立するための実証として、氏はまず、庚午年籍と庚寅年籍とを取り上げ、それらの後世に於ける利用或いは言及の程を考へることから出発する。

ところで、庚午年籍については、この戸籍は氏姓の根本として永世保存を命ぜられてゐるから、後世に言及の対象となるのは当然である、というだけである。この考へるの背後には、氏の論文全体に通ずる考へ方からして庚午年籍は近江令による最初の戸籍であるということがすでに省略されてゐると思われ。その故か特に庚寅年籍を取り上げ、後世に於ける言及の仕方を二通りに、即ち(A)論者が自らの主張の根拠として言及する場合と(B)論者が改正を要求すべき誤りの起處となつてゐる戸籍を挙げる場合、とに分け、続紀から和銅四年八月丙午系(Aの場合)と延暦元年十二月庚戌系(Bの場合)とを引用されている。或いは氏は省略されたのであらうが、管見の範囲では続紀和銅六年五月甲戌系や天平宝字八年

七月丁未条にも庚寅造籍に關係した史料がみられる。そして氏口・言及される例の多少に限らず、また如何なる形であつても向題が發生した所に庚寅年籍が引き合ひに生じられるのは、この戸籍も庚寅年籍と同じような歴史的條件の下に造籍されたからであらうとされ、その条件としてこの戸籍は淨御原令施行に伴う初度の戸籍であるということに帰着せしめるのである。庚寅年籍と淨御原令戸令との關係は日本書紀持統天皇紀からも想定することができ、造籍に従事した官吏が特別の饋饗と慰意とを以つてあたつたということも一般的なこととして認められるであらう。この部分に於いて氏が考へられたことは承認できると思われるが、それを正にした考え方は、つまり、淨御原令施行後の最初の戸籍であらうから後世において言及の対象となつた、ということ、またこの方法と向題になる各年次の戸籍全般に於いて及びやうという態度は人と納得せしめる根拠が薄いように思われる。何故ならば、もう少し庚寅・庚寅年籍を掘り下げて考へてみねばならないからである。

庚寅年籍が他戸籍と特別視されるのは、氏もい

れる如く「氏姓の根本台帳」と見做されたからであり、この点は井上光貞氏の研究（「庚寅年籍と氏姓」）日本古代史の諸問題所収）に明らかである（なお、井上氏の庚寅年籍に關する考え方は決して満足すべきではなく、それを補つたものに拙稿「庚寅年籍永世保存の理由」（古代史五の三四）がある。同時に参照いただきたい）。庚寅年籍の成立時期は大化改新後に一時的な私有民所有が復活された時期であつたこと、また天武朝に前しく八色姓が制定され賜姓されたこと、寧ろ事實を考へておかねばならない。そこで当然、庚寅年籍の次の戸籍といえる庚寅年籍は庚寅年籍と右に述べた如き事情を待たずに入つて造籍されたものであるといえる。ここに慎重な態度が持たれなければならなかつた理由が存し、基本的であるべき庚寅年籍との間に生じた齟齬の調整の必要から個々後世に於いて引用されるに至つたのである。近江令や淨御原令によつた最初の戸籍であるということと除外する必要もあるまいか、これだけの意味で重要視されたので口決してないのである。

庚寅氏が後世に言及された戸籍例として合計八例

の史料を引用せられ分折されているが、直接であれ間接であれ、庚午年の虚籍なり戸籍を問題としているの口六例も見られるのである。この口六例、何らかの戸籍を問題とする場合、多く庚午年籍から事情を説き起し言及しているのであるから、庚午年籍のみが特別視される理由とそれだけ強調する事実を示し、この場合に庚午年籍以外の戸籍は改悪等の起案であるというだけの意味しかもちえないのである。広く全戸籍についていうならば、戸籍は單に財政の目的のみではなく、氏姓や身分にわたってまでも常に監視の目を光らせていたことを知らせるのであり、特殊な背景なり事情なりを特に考慮に入れろものは庚午年籍以外にはないのである。庚寅年籍は庚午年籍に最も近い時期の戸籍であり、加えて以上に述べた如き事情も加わり庚午年籍に次いで言及されたわけである。

しかし、この可成りに抽象的なる反論だけでは虎尾氏の納得を得られ、氏が御説を撤回するとは思えないので、氏が論文の(三)と(四)とで論せられたことを遂一反論してゆく。

Ⅲ

氏は論文の(三)で六例の後世言及例を引用されて、先にも小れた戸籍言及法(A)・(B)に分けておられる(以下)の数は論文の中に引用された史料番号である。)この六例のうち、庚午年の虚籍なり戸籍なりとは全く無関係の例が一つある。それは(4)の統紀宝龜四年八月辛亥条の例で、こゝでは養老五年と神龜四年の戸籍のみが問題とされているだけであり、氏の言及法分類によると後者戸籍の(B)の場合となるが、実にこの例は氏の善悪に一つの弱點を与えろものとなっているのである。その外で、(2)、(5)、(6)の各場合は全て庚午年籍と和銅元年(2)、天平宝字二年(5)、(6)の戸籍との間に生じた祖貽の調整であつて問題になるところは無い(しかし、氏の考へ方では戸籍を問題にするのは当時の戸籍であるがこの点は後述)。(3)の場合には延暦十年九月戊寅条でみえ、「己等祖庚午年之後至于己亥年始蒙賜朝臣」云々とあり、太宝二年和銅元年、同七年の各戸籍に朝臣と記載され、のち養老五年戸籍で朝臣を削除されたのを訂正しているのである。こゝで何も庚午年籍を引用する必要はないようであるが、朝臣姓削除は庚午年籍に朝臣記載が

ないというのが理由なのである。朝臣賜姓が庚午年より以後であるから無いのは当然である。そこで問題にするところは、何故に養老五年造籍時に虚く過去に勘及して調査したのかという点である。最後に残ったのが最も厄介な例である。これは大日本古文書三にみえる天平勝宝三年三月七日坂田久比麻呂解で、要奥を引用すると

(前略)

以前人夫祖父祖母籍、自庚午年始五比七比籍、附

淨良人所貫、云々

(後略)

というのである。こゝで問題にするのは傍奥の部分の五比、七比の戸籍と何何というのであるか、という点である。氏は川上多助氏の十二回の戸籍という説、瀧川政次郎、宮本枚西氏の五回の、七回のとする説と共にしりぞけて、五回目、七回目と考えられた。具体的にいへば、五回目、和銅元年戸籍、七回目、養老五年戸籍ということになるのである。そして、この解文は養老七年以前に証拠を置いて論じたものであるという(宮本枚氏「造籍年次について」統紀研究三の三)。この意味からすれば養老七年に

最も近い時期の戸籍である同五年戸籍をあげれば十分であると思われるのに、更にその前の和銅七年戸籍を越えて和銅元年戸籍を特に明示したのは何故であらうか、が問題とされる。

以上のようないくつかの疑問について、氏は論文(四)に於いて理由づけを行ふことになるのである。こゝで氏は庚寅年籍以後の戸籍で(A)または(B)の形で引用言及されるものを表(イ)の如くに示される。私はこれに加えて、庚午年籍と何らかの関係している戸籍について(C)として書き入れておいた。これらのうちで、氏は大宝二年戸籍の(A)の一例(3)と養老五年戸籍の(A)の一例(1)を言及理由明白であるとして省略し、表(イ)を示され、これらは必ずや庚寅年籍と類似した特別の歴史的意義をもっているであらうとされるのである。

(1)

戸籍	A	B	計
大宝二年	1		
和銅元年	1		
養老五年	1	1	2
神龜四年	1	1	2
天平宝字三年		2	2

戸籍	A	B	計
和銅元年	1	1	2
養老五年	1	1	2
神龜四年	1	1	2
天平宝字三年		2	2

(a) 養老五年戸籍は同年に頒行された戸籍式に基づく最初の戸籍であるとする。しかし、この造籍式が律令時代の唯一のものであるという証拠でもあればともかく、偶々知られるこの造籍式を唯一の理由とすることはできない。

(b) 天平宝字二年戸籍は前年四月四日勅にみえる戸籍記載法、または同年五月二十日施行の養老令戸令によるものとされる。前者は「其戸籍記、无姓及族字、於理不穩、宜為改正」というのであるが、氏もこれに關し注で論及されている如く右の前文にある「其高麗百濟、新羅人等、久慕聖化、未附教俗、志賴給姓、悉聽許之」に關係をおびていることも考へられる（この處、或いは大宝二年戸籍には姓のことが特に強調されたのではないかという考へが井上光貞氏によつて論じられてゐる。「氏族」の性質とその起源は日本歴史一〇〇号を参照せられたい）。しかし私はこの説を全面的に支持して虎尾氏の見解を否定する根拠とはし難い。なお批判の余地が残されていると思ふからである。とすれど、これを根本的な理由とするわけにはゆかない。しかし、氏はおそらくそれを見こして養老令施行という事情を用意さ

れている。勿論、戸令と造籍の關係を切りはなして考へることはできないであらうが、それよりも強い關係口造籍式との關係である。こゝで新しい造籍式が出現したと考へるのであらうか。もし、養老五年の造籍式が御里制施行に伴う新式であつたりしたら、必ずそれ以前にも式があり、また事情によつては他にも存在したかも知れぬの下あり、その式による初度の戸籍もあつたはずである。そうしたことを明瞭に知らせる戸籍が知れないのは式の存在しないことを物語るに過ぎぬ考へをもつこともできようが、戸令の施行は新造籍式の発布ということと具體的に知りたものである。また、新令や新式によれば庚寅年籍と同じ趣旨で戸籍をもつ氏族、身分等に対する慎重な態度がもたれるのは当然である。一方、段令、前述の戸籍記載法が昇化人と懸關係であるとしても、それだけで十分でない。何故なら、他に同趣旨の例を見出すことができるからである。即ち、天平宝字三年十月八日の「天下諸姓舊君室者、豫以公字、伊美吉以尼寸、神護景雲二年五月三日の「物、中略、續見諸司入妻名籍、或以国主国祚爲名、何朝妻名、可不奉也、或取眞人朝臣立字、以氏以

字、是近習姓、復用佛菩薩及賢聖之号、中、其如比等類、有先善者、亦即改換、務從「孔典」、また宝龜元年九月三日の「以去天勝室九歲改首史姓、並為社登、彼此雖分、氏族混雜、於事不罷、宜從本字」等である。これらと嚴密に戸籍記載に關する法令と口いえないとしても、戸籍記載上關係を有していたといえるものではないだろうか。

(c) 神龜四年戸籍には種條約に何ら理由を加えることができないが、偶然というよりは起るべくして生じた一例なのである。

(4) 最後に和銅元年の戸籍であるが、この史料で何故に五七と七七というのであろうか。正史などで「何七」という場合には「何回」という意味で使われている如くであるが、この場合は矢張り氏のいわれる如く五回目と七回目ということを意味していると思われる。つまり、この意味することは庚午年籍と五回目戸籍Ⅱ和銅元年戸籍と七回目戸籍Ⅱ養老五年戸籍の三回の戸籍には良と記載されていたということなのである。当然このように考へると二・三・四・六の各回には賤となっていたことになる。私にはこの通りであつたと考へたい。他にも同じよ

うな例があるし、庚午年籍が根本台帳であるからこの間に乏之良とめられ、他戸籍を訂正する最大の理由とすることが可能なのである。従つて和銅元年戸籍と引用したことは、これが大宝令による最初の戸籍であるからという説は成立しないと考へるべきである。以上、虎尾氏と同じ史料を使用し、全く反対の推論を推然と羅列してきた。史料解釈ということは一つのものをめぐるとき、実に正反の事態を考慮できるような余地を残すものであると私は常日慎をえている。私は氏の説に反対のための反論を述べようとは決して考へていない。氏の和銅元年及び他戸籍であつても、その説明がより合理的なものとなれば私は進んでこの反論を撤回し放棄するであらう。しかしながら、現段階に於いては氏は余りにも他戸籍をこれらも全て永世保存に処するほどに特徴づけられてしまふ意味にあるといえる。この故に、私は横井氏の説に反対せざるを得ないのである。

IV

氏が論文(四)で神龜四年戸籍の引用を偶然といわれたが、偶然といえども庚午年籍を含めても全て偶然の

言及なのである。たゞ多くは庚午年籍と何らかの形で向題をもっているということが重要なのである。同時に、我国の戸籍では氏姓、身分等にまで造籍時に厳密さを要示していたということを認める必要があろう。この故に庚午年籍とは関係無しにも向題を生ずる場合があつたのである。神皇四年戸籍はそのよい例である。大宝二年戸籍がそれ自体として何ら直接的に引用言及されずとも、この戸籍の存在価値はいさゝかも減少しないし、氏のこの論文でとられた方法でも疑問を解決することにはならないと思われる。そこで氏に重ねて懸望したいことは、大宝二年戸籍に見られる記載様式の相違を追及され、私が日本正史掲載の小論で挙げた二案の解決に意を拂つていただきたいという点である。

敬愛する宏茅虎尾氏の論文に対して贅詞をつらねて無謀な反論を綴ったが、その非礼を御詫びし、且氏の今後の御研究に対して一つの捨石ともなれば望外の望みを果したといえるであらう。